「青陽社」についての試論－大塚金吾、石川誠、石川真琴を中心に

赤　間　和　美

はじめに

本研究は、在京の宮城県出身者の会「青陽社」に焦点をあて、特に大塚金吾、石川誠、そして、石川真琴の経歴を明らかにし、その人脈を再考することを目的とするものである。「青陽社」について言及のある先行研究は多くはない。主要な先行研究としては、1996年に編纂された『仙台市史』において、西村勇晴氏が宮城県内での洋画の普及を概説するなかで、その結成を1922年末とし、1928年の「東北産業博覧会」における「青陽社」の人脈を指摘されている[1]。また、同書において、有川幾夫氏もまた、中野和高の初期の経歴として「青陽社」に触れられている[2]。

「青陽社」については、1923年に第1回展、1929年に第2回展が開催されたことが分かっているが、展覧会目録などは残っておらず、美術雑誌などにおいて報じられた出品者の名前のみがわかっている。出品者については、宮城県における洋画の普及に寄与した中野和高や菅野廉については、作品も多く現存しており、まとまった経歴を確認できるが、その他の人物については検討の余地がある。

特に、第1回展と第2回展に出品した石川誠については、『資生堂ギャラリー七十五年史』によって、中野和高らとともに大塚金吾の遺作展の世話人となったこと[3]、また、五十殿利治氏によって、石川誠夫妻が1930年代にパリで林芙美子と交友したことが明らかにされている[4]。さらに、五十殿氏は、大塚金吾と石川真琴が日比谷美術館の閉会式に参加したことに言及されており[5]、鳥瞰図の専門家である藤本一美氏は、地図絵師として石川真琴に触れられた[6]。

今回は、これらの先行研究を踏まえ、第1章では、1923年の「青陽社」第1回展の出品者12人のそれまでの経歴をまとめ、東京美術学校の卒業生が半数を占める点、「白馬会」や「光風会」、日比谷美術館との接点を指摘する。

第2章では、1929年の「青陽社」第2回展に出品した中野和高、石川誠を中心に、その渡欧歴や「帝国美術院展覧会（以下、帝展）」での入選歴に触れ、宮城県出身者による洋画振興という背景に言及する。

第3章では、大塚金吾が、「青陽社」の人脈の一部が移行した、河北新報社主催の公募展「東北美術展覧会」の中心人物であった点などを明らかにし、第4章では、二度目の渡仏を中心に石川誠の経歴を追う。最後に、第5章では、東京教材出版社の社長となった石川真琴の経歴を確認する。

1　「青陽社」第1回展（1923年）

「青陽社」第1回展（1923年5月5日－10日）は、星製薬で開催された。星製薬は、現在の福島県いわき市出身の星一（1873-1951）が創業し、京橋に本社を置いた製薬会社である[7]。『中央美術』第92号では、「第一回青陽社展 五月五―十。仙台出身洋画家十二人。星製薬階上」との予告が載り[8]、同誌の第93号では、「在田稠、石川誠、松永津志馬、鷹野路夫、芦立文雄、菅野達二、大塚晩秋、吉岡貫一郎、石川真琴、北野和博［ママ］、佐藤均、山田京之助の仙台出身者」[9]とあり、12人が参加したことになる。『東京朝日新聞』（1923年4月13日）においても、「青陽社第一回展 在田稠氏外十一氏の仙台出身洋画家達によつて組織されたる青陽社は第一回展覧会を五月五日より十日まで星製薬楼上にて開催」との予告がある。

東京美術学校の卒業生名簿や主要な美術展覧会の出品歴を確認すると[10]、その半数が東京美術学校に在学していたこと、そして、黒田清輝（1866-1924）が中心となって設立した洋画団体である「白馬会」、そして、その解散後に旧白馬会系の画家らによって設立された「光風会」に入選を確認することができる。それぞれの「青陽社」第1回展までの経歴を大まかにまとめると以下の通りとなる。

1-1　佐藤均

最も年長であったと思われるのが、黒田清輝の日記にもたびたび登場する佐藤均（1875-1926）であり、1902年に東京美術学校西洋画科選科を卒業した画家である。「文部省美術展覧会（以下、文展）」第1回展（1907年）のほか、「白馬会」第7回展（1902年）、第10回展（1905年）、第12回展（1909年）、第13回展（1910年）、そして、「光風会」第2回展（1913年）に出品歴があり[11]、「国民美術協会」の会員でもあった。

「国民美術協会」は、1913年に設立し、1919年以降、黒田清輝が会頭を務めたもので、会員作品の展示のほか、講演会や海外美術展を開催し、美術館建設や学校制度の改革に関する提言をした団体である[12]。佐藤は、大阪天王寺公園内美術館にて開催された「国民美術協会第一回西部展覧会」（1913年）をはじめ、上野公園内竹之台陳列館で開催された「国民美術協会」第3回展（1915年）、第5回展（1917年）、三越呉服店で開催された「第4回国民美術協会小品展覧会」（1921年）に出品したものと思われる[13]。

1-2　在田稠

在田稠（1887-1941）については稿を改める必要があるが、令孫の小川隆章氏、そして、『東京パック』について研究した高島真氏によれば、宮城県遠田郡の生まれであり、後に漫画家として活躍する人物である[14]。1907年に仙台第一中学校（現・宮城県仙台第一高等学校）を卒業、上京の年と思われる「白馬会」第11回展（1907年）に入選が確認できる。『日本美術年鑑（初年版）』には、「白馬会本郷研究所及び東京美校に学ぶ」[15]とあるが、中学卒業と同時に上京したのであれば、白馬会の第一研究所にあたる白馬会溜池研究所か、第二研究所にあたる白馬会原町研究所（1907年に菊坂研究所から改称）のいずれかに学んだ可能性が高い[16]。

なお、上田耕作（1899-1991）によると、在田は仙台で開催された「東北洋画会」第1回展（1907年）の目録にカットを寄せている。この「東北洋画会」は、1905年に組織された仙台初の洋画団体とされる「パレット会」を前身とし、翌年に黒田清輝のすすめで「東北洋画会」と改称した団体である。1907年9月に第1回展を開催し、黒田清輝をはじめ、久米桂一郎（1866-1934）、岡田三郎助（1869-1939）、和田英作（1874-1959）、中沢弘光（1874-1964）といった、白馬会系

の画家たちの作品を招待展示した[17]。

また、五十殿利治氏によれば、在田は「銀皿社」に参加した。「銀皿社」は、雑誌『銀皿』を刊行し、日比谷美術館で「東郷青児個人展覧会」(1915年9月)を主催するなど、山田耕筰(1886-1965)を中心とする芸術サークルの近くで活動したとされる[18]。日比谷美術館は、佐藤久二(1888-1982)が若手画家たちを紹介する「美術館」の必要を感じ、1913年12月に麹町有楽町に開設した展示施設である。先述した「国民美術協会」の事務所が一時的に置かれ、「白馬会」の第一研究所にあたる白馬会溜池研究所が改称した葵橋洋画研究所が主催した展覧会も開催された。

1-3　芦立文雄、松永津志馬

芦立文雄(生没年不詳)は、1919年に東京美術学校西洋画科を卒業、研究科に進学した。「国民美術協会」第5回展(1915年)、「文展」第10回展(1916年)、「太平洋画会」第15回展(1918年)[19]、「平和記念東京博覧会」(1922年)、「光風会」の第12回展(1925年)、第13回展(1926年)、第14回展(1927年)に入選を確認できる。1927年には「芦立文雄油絵画会」という会費制の油彩作品の頒布会を企画しており、この案内状の「青陽社同人一同」による紹介文によれば、芦立は「元勲故黒田清輝先生の白馬会研究所」に修学しており、賛助会員には、東京美術学校長の正木直彦(1862-1940)、岡田三郎助、小林萬吾(1870-1947)の名前がある。

松永津志馬(1893-1966)についても稿を改めたいが、『人事興信録』第4版(1915年)によれば、熊本藩士の家柄の生まれであり、義姉が伊達寧裕の息女である。修学歴は不明であるが、「東京大正博覧会」(1914年)のほか、「光風会」第9回展(1921年)に題名不詳の滞欧作を出品しており、『中央美術』第82号(1922年)に「アンデパンダンの人々」を寄稿、「平和記念東京博覧会」(1922年)にも出品がある。その後、築地小劇場の舞台装置に携わった人物であり[20]、村山知義とともに第一書房の『近代劇全集』に舞台装置の挿絵を寄せている。

1-4　菅野廉、山田京之助、吉岡貫一郎、鷹野路夫

菅野達二は、上田耕作によれば、菅野廉(1889-1988)の画号である[21]。菅野は、1910年に宮城師範学校を卒業し、宮城県内の小学校教師となるも上京、1915年に東京美術学校図画師範科を卒業して在京の小学校教師となった[22]。「二科美術展覧会」第13回展(1926年)、「中央美術」第7回展(1926年)以降、達二の画号で入選がある。

山田京之助は、「第5回青風会洋画展」(1961年)のパンフレットによれば、山田武平(1893-1961)の画号であり、仙台第二中学校(現・宮城県仙台第二高等学校)を卒業した人物である。1916年に東京美術学校図画師範科を卒業、当時は在京の小学校教師であった[23]。

吉岡貫一郎(生没年不詳)は、1919年の東京美術学校西洋画科の卒業生であり、『少年倶楽部』や『雄弁』などの雑誌にその名前がみられる。

鷹野路夫(生没年不詳)は、修学歴不明であるが、『帝国教育』、『科学画報』などの雑誌の表紙を手掛けている。

1-5　北野和高

引用した文中の北野和博は、後に中野に改姓する北野和高(1896-1965)の誤植と思われる。北野は、現在の愛媛県大洲市に生まれ、家族とともに仙台に移住した人物であり、仙台第一中学校を卒業後、1914年に上京、葵橋洋画研究所に学んだ。その後、1921年に東京美術学校西洋画科を卒業、研究科に進学、「帝展」第3回展(1921年)、第4回展(1922年)に入選した[24]。

1-6　大塚金吾(晩秋)

大塚金吾(1894-1941)、画号、晩秋は、結城素明(1875-1957)によると1894年に仙台に生まれ、仙台市東二番丁高等小学校を卒業した[25]。大塚自身の回想によれば、1908年頃に河北新報社長の一力健治郎(1863-1929)の玄関子をしていたという[26]。『海軍美術』には東北学院を卒業とあるが詳細は不明である[27]。『日本美術年鑑』によれば、1912年、葵橋洋画研究所に入学とあるため[28]、この二年後に北野和高も入学したことになる。

『美術新報』によると、大塚は帝大赤門前東洋スケート場で、鈴木美都田、平澤陸三とともに「三人洋画小品展覧会」(1915年5月14日－16日)を開催した[29]。日比谷美術館で開催された葵橋洋画研究所主催の「油絵小品展覧会」(1915年11月3日－7日)にも参加し、《夜の自画像》と《芝浦の夕》を出品、最終日の懇親会の余興では「土人の王様」に扮して裸踊りを披露した。この時の写真が、年を跨いで発行された記念集に掲載されている[30]。その後、五十殿利治氏が明らかにされたように、大塚は1915年12月11日に開催された日比谷美術館の閉会式の写真〔図1〕に、館主の佐藤久二、後述する石川真琴と共に写っており、閉会式の余興の風刺劇にも参加した[31]。

自身の回想によれば、後にアルスから『現代商業美術全集』(1928年)を出版した濱田増治(1892-1938)と交友があったという[32]。また、日比谷美術館閉館後、1916年、1918年に個展を開催したと述懐しているが、詳細は不明である[33]。この間、「光風会」第5回展(1917年)に入選しており、1918年8月10日の黒田清輝の日記には「訪客　午前研究所生徒大塚金吾極楽寺内佐藤氏方」とある。1921年には、河北新報社東京支局に勤務となった。

1-7　石川真琴

石川真琴(1886?- 没年不詳)は、仙台第一中学校の卒業生である。同校同窓会が1932年に発行した「会員名簿」によれば、石川真琴は1906年の卒業生(第12回生)であり、同窓の在田稠(第13回生)の1年先輩、北野和高(第20回生)の8年先輩である。

後述するが、上京後、石川真琴は白馬会溜池研究所に学んだものと思われる。その後、日比谷美術館にて「石川真琴、上野山清貢 水彩 パステル画展覧会」(1914年10月9日－13日)を開催しており[34]、「石川まこと」として、上野山清貢(1889-1960)とその妻、素木しづ(1895-1918)とともに、関根正二(1899-1919)の日記に登場する[35]。

また、日比谷美術館では、「田中黒子、石川マコト水彩画展覧会」(1915年11月28日－12月2日)も開催されている。おそらくは、この石川マコトは石川真琴と考えるのが自然であると思われるが、『美術週報』において、女のような名前で作品を発表するなと痛烈に批判されたためか[36]、『みづゑ』第131号にのみ「田中黒子、石川誠両氏の作四十六点の展覧会」と表記されている[37]。この点から、後述する石川誠が出品した可能性もあるため、慎重に考える必要がある

だろう。その後、この石川真琴が大塚金吾とともに、日比谷美術館の閉会式に参加したことは前述のとおりである。

以降、石川真琴の名前は、鳥瞰図の専門家である藤本一美氏が指摘されたように、「大東京鳥瞰図」の原図を完成させた青年画家としてあらわれる[38]。『東京朝日新聞』(1921年11月3日)〔図2〕が伝えるところでは、「氏は溜池洋画研究所で修行し今年卅五歳」であり、同様に『読売新聞』(1921年11月3日)では、「東大久保一番地にある石川真琴氏」は「今年三十五歳の青年画家」、「仙台第一中学校を卒業後画を白馬会で学んだ人である」という。

この「大東京鳥瞰図」については、両紙が伝えるところによると、4年にわたる苦節の結晶であり、この原図を目にした東京市長の後藤新平(1857-1929)が激賞して、東京市内の全小学校の教育掛図として採用したという。後藤新平は、逓信大臣や内務大臣、東京市長などの要職を歴任した政治家である[39]。なお、佐藤久二のスクラップブックには、後藤新平の名刺が日比谷美術館後援者というメモとともに残されている。

しかし、『読売新聞』(1921年11月21日)、『東京朝日新聞』(1921年12月29日)によれば、東京造画館の塚本岩三郎や小林隆三が「大東京鳥瞰図」を盗作であると主張した。石川真琴は造画館に編集員として勤務していた。同紙によれば、憤慨した石川は、東京地方裁判所に名誉毀損の訴訟を提出したという。こうした騒動後に「青陽社」第1回展に参加したということになる。

1-8　石川誠

石川誠(1895?-没年不詳)は、『日本美術年鑑』によれば、1895年生まれとされている。石川誠については、西村勇晴氏によって「帝展」に入選歴があることは既に触れられており[40]、冒頭で述べたとおり、『資生堂ギャラリー七十五年史』や五十殿利治氏によって言及されてきたが、これまで包括的にその経歴が検討されたことはなかった。また、逓信事業に関係して各方面で活躍する人々を新聞記者の内海朝次郎(1900-1946)が取材しまとめた『逓信畠の先輩巡礼』(1935年)に、その経歴が言及されていることも知られていない[41]。

同書では、石川誠の家柄について、「維新前には小さいながらも何万石かの大名、宮城県角田藩主だつた」と語られている。また、石川誠は1906年に小学校を卒業、当時の住居は半子町であり、12歳の頃には父と別居中の母を助けるために仙台郵便局に給仕、1907年に局長付になったのを期に、夜間中学に通学したという[42]。その後、当時、逓信大臣だった後藤新平が来仙した際に上京を決意し、画家を志して1912年に上京、後藤新平宅を訪ねるも門前払いにあう。東京電灯会社に勤務した後、影山銑三郎、山岸哲夫らの手助けで、逓信省の電気局技術課(明治45年頃?)、文書課(大正5、6年頃?)に勤務、1917年に東京美術学校に合格するも、勤務の都合上、やむを得ず早稲田大学の裏手に出来た紀淑雄(1872-1936)経営の日本美術学校に入学、1921年に卒業したという。

以降の展覧会歴や消息をまとめると、『資生堂ギャラリー七十五年史』によれば、同年に資生堂で開催された「木下孝則氏渡欧送別展覧会」(1921年9月22日－25日)に参加しており、「参加者は、石川誠、中川一政、小澤(秋成か)、玉生、林(倭衛か)、鍋井(克之か)、工藤(三郎か)ら」であるという[43]。翌年の「平和記念東京博覧会」(1922年)に《冬の郊外》〔図3〕が入選しており、同年の制作とされる《晩秋の小道》〔図4〕を宮城県美術館が所蔵している。遠景へと続く道は、石川の作品に典型的なモチーフである。この年、『東京朝日新聞』には「墓[?]労約二週間郷里仙台へ赴く由」(5月3日)、「八月末まで房州布良に滞在の由」(7月14日)との消息が伝えられている。

以上のように、「青陽社」の出品者は、北野和高や石川誠のような駆け出しの画家や、菅野廉や山田京之介のような在京の教師、在田稠のような漫画家、石川真琴のような地図絵師、さらには大塚金吾のような新聞記者などがおり、多彩な経歴をもつ人物の集まりであったといえる。また、東京美術学校の卒業生が半数を占めており、松永津志馬や大塚金吾、石川真琴といった人物が、「白馬会」や「光風会」に出品、あるいは、その研究所に学んでいたものと思われ、なかでも、在田稠、大塚金吾、石川真琴が日比谷美術館に接していた点は、第1回展時点の「青陽社」の人脈の繋がりとして重要であると思われる。すなわち、「青陽社」の人脈は、仙台における「東北洋画展」(1907年)にはじまる、東京美術学校や「白馬会」を軸とするアカデミズム、あるいはアマチュアリズムともとれる、未分化で多面的な洋画振興の様相を示唆しているのである。

2　「青陽社」第2回展(1929年)

「青陽社」第2回展は、『アトリエ』3月号によれば、1929年2月8日から13日まで、日本橋丸善で開催され、「宮城県人同志組織の会、中野和高、石川誠、菅野泉三[ママ]、三氏の帰朝を記念」したものであった[44]。

第2回展が6年後の開催となったのは、おそらくは第1回展の4ヶ月後に東京を襲った関東大震災をはじめ、中野和高や石川誠が渡欧したこと、大塚金吾が仙台の河北新報社本社に異動となったことも大きく影響したに違いない。

また、三氏の帰朝を記念としてはいるが、実際には、他の画家による出品もあったようで、『日本美術年鑑』には、出品点数51点とあり、後述するように、大塚金吾も出品したものと思われる[45]。大塚金吾については次章で検討することとし、この章では、「青陽社」第1回展の後から第2回展までの北野和高、菅野泉、そして特に、石川誠の渡欧歴と帝展入選について述べる。

2-1　北野和高、菅野泉

北野和高は「青陽社」第1回展の翌年に渡欧した。パリにおける日本人画家の出品歴をまとめた「巴里憧憬と四つのサロン」によれば[46]、北野和高は「サロン・ドートンヌ(Salon d'Automne)」第17回展(1924年)に入選している。この翌年、柔道家の石黒敬七(1897-1974)が編集人となってパリで刊行した日本語新聞『巴里週報』創刊号(1925年8月1日)の「在巴里日本人一覧表」には「北野和高 103 R. Vaugirard」とあり、以降も消息が報じられた[47]。北野和高のパリ時代については稿を改めたいが、『巴里週報』において、「朝日新聞渡欧飛行四勇士歓迎慰労会」(1925年9月23日)、「田辺孝次氏送別会」(1926年11月10日)の発起人に、北野和高とともに石川誠が名を連ねている点は指摘したい。

北野から姓を改めた中野和高は1927年8月下旬に帰国す

ると、「帝展」第8回展で特選となり、翌年には「一九三〇年協会」の会員として滞欧作を発表、同年秋には「帝展」第9回展で再び特選となった。また、1928年4月15日から6月8日まで仙台で開催された「東北産業博覧会」の公募展では、岡田三郎助、和田三造（1883-1967）とともに、中野和高が西洋画部門の審査員となり、山田京之助、芦立文雄、大塚金吾、菅野廉といった「青陽社」の面々が入選した[48]。西村勇晴氏が指摘しているように、「東北産業博覧会」に在京の宮城県出身者が多数参加できた背景には、「青陽社」のつながりがあったものと思われる[49]。

この博覧会で銀賞を受賞した菅野泉（生没年不詳）は、中野和高の1年後輩であり、1922年に東京美術学校西洋画科を卒業、研究科に進んだ人物である。少なくとも1928年8月から9月にかけて『巴里週報』に菅野泉と思われる名前があり、1930年以降は「帝展」や「槐樹社展」に出品歴がある。

2-2　石川誠

石川誠は、「青陽社」第1回展に参加した後、1923年6月から1925年2月まで学習院の書記として勤務した[50]。この間、「帝展」第5回展に《漁村》（1924年）〔図5〕が初入賞した。以前の作品にみられたような草木の柔らかな筆致はなくなり、遠景へと伸びる小道と家並みが平明に描かれている。引き続き、『東京朝日新聞』には「29日から一週間愛知の亀崎に旅行」（1923年12月30日）、「月末まで仙台市半子町寿徳寺に滞在」（1924年8月8日）といった消息が伝えられた。

内海によれば、石川は帝国美術院長の福原鐐次郎（1868-1932）の知遇を得て、後藤新平に再会を果たした。後藤新平は、石川を門前払いした贖罪として留学のための後援会を組織し、渡仏を支援したという[51]。『日本美術年鑑』には、1924年から1927年まで外遊とあるが、これは誤りであり、『東京朝日新聞』（1925年4月2日）に「石川誠氏 十三日横浜出帆箱根丸で渡欧」とある[52]。また、『巴里週報』第3号（1925年8月17日）、第4号（1925年8月24日）の住所録加入者に、石川誠の名前を確認することができる。

「巴里憧憬と四つのサロン」によれば、石川は渡仏後、「サロン・ドートンヌ」第18回展（1925年9月26日－11月2日）に《雨後（Après la pluie）》という油彩画で入選した[53]。この入選作と思われる図版〔図6〕が『真と美の評論：文学と芸術（Revue du vrai et du beau : lettres et arts）』に掲載されている。図版は判然としないが、「つい先ほど落ちた雨の湿度を残している」ようなみずみずしい自然描写に賛辞が贈られ、次のように石川誠の経歴が紹介されている。

「日本人会館（Cercle Japonais）の展覧会について、マコト・イシカワの2点の出品を特に強調したい。この芸術家による《女性の肖像（Portrait de femme）》と《羊（Agneau）》の習作は、その率直な調子と誠実な性格で私を楽しませた。センダキ（Sendaki［sic］）に生まれたマコト・イシカワは幼少期から素描や絵画に惹かれていたが、彼の家にはほとんど財産がなく、早くに両親を亡くし、独学して働きながら修学に必要な費用を稼いだという。国の美術学校に入り、卒業後すぐ日本の美術展に展示することができた。彼の試みは、他の二、三の団体、とりわけパリのサロン・ドートンヌにも同様に認められた。」[54]

内海による伝記と相違する部分はあるが、この雑誌で取り上げられた苦学の日本人画家は石川誠であるといってよいだろう。内海によれば、石川は「ゲラン氏の研究会で暫く学んだ」という。シャルル・ゲラン（Charles François Prosper Guérin, 1875-1939）は、ギュスターヴ・モローに師事した画家である。柳沢秀行氏が指摘しているとおり、1920年代に渡仏した日本人画家の多くは、ゲランがパリ6区のグラン・ショミエール通りにあった「アカデミー・コラロッシ Académie Colarossi（1870-1930）」で指導していたと回想しているが[55]、詳細は定かではない。

また、文中の「日本人会館（Cercle Japonais）」の展覧会は、「第1回在巴里日本人美術展（日本人会展）」（1925年10月3日－31日）であると思われる。江川佳秀氏によれば、本展は、日本大使館や日仏銀行の寄付によって、1928年の第4回展まで日本人会館（日本人倶楽部）で開催されたものである[56]。『巴里週報』附録（1925年9月27日）の展覧会目録では、41作家62点となっており、石川誠の名前はない。しかし、これとは別に47作家の記録のある活字の目録があることがわかっており[57]、同目録を調査した江川氏によれば、第1回展の目録には、確かに石川誠の《女性の肖像（portrait de femme）》と《羊（agneau）》の出品が記載されていたようである。

翌年の日本人会の第2回展（1926年11月10日－12月10日）には、65作家126点が展示され、石川は2点の風景画を出品したようである。なお、第1回展、第2回展には北野和高の出品もある[58]。

当時、石川は、日本人画家たちが多く滞在していたパリ5区のソムラール通り（17, rue du Sommerard）の下宿に滞在しており、石黒敬七と親しかったようで、『巴里週報』では、ほぼ毎号のように石川の消息が報じられている。なかでも石川の人柄を伝えるのは、1925年12月7日に日本人会で開催されたビリヤード大会でのエピソードである。この大会で優勝した石川は、景品として懐中時計を授与されて得意げであったが、祝杯をあげろとせがまれ、シャンパンを4本も奢るはめになったという。「近頃稀れな豪遊振りで寧ろ悲壮の感があった」といい、当時のパリにいた日本人たちの喧噪が伝わってくる[59]。

石川は、1926年11月27日には筥崎丸でフランスを出発した。出発を前に、同月18日に日本人会で送別会が開催された際には、『巴里週報』に「送らるゝ本人が下戸でないので酒を寄付する向きも大分あるといふ」[60]という予告があり、かなりのお酒好きで羽振りのよい人物として知られていたようである。

以上から、石川誠は1925年8月から1926年11月までパリにいたということになる。帰朝後の住所は、「本郷区駒込千駄木町134」と『巴里週報』に報じられており、1927年1月には帰国したものと思われる。この年、三越にて「石川誠氏滞欧洋画展」（1927年6月16日－21日）が開催された際には、《春の地中海》〔図7〕とともに、『美術新論』に吉村芳松（1886-1965）、『アトリエ』に松本弘二（1895-1973）が展評を寄せた[61]。後者には、会場に座す石川誠の姿も掲載され〔図8〕、松本は学習院勤めだった石川の経歴に触れた上で、温和な作風を「彼が貧窮生活の中にあって、反逆者ともならず素直に、明るく育つて来た反映である」と評価した一方で、生彩が欠けているとも指摘した。

また、同年の「帝展」第8回展には《カンヌ風景》（1927年）〔図9〕が入選、翌年の「帝展」第9回展にも《代官山風景》（1928

年）〔図10〕が入選を重ねた。いずれも渡仏前の平明さを失わず、遠景へと続く小道が特徴的である。石川の三度目の帝展入選については、在仙の画家、菅井庄五郎（1910-1986）が、渋谷の同潤会住宅に住んでいた石川誠のもとに友人達が押しかけて祝杯をあげたことを報じた掲載紙不明の記事を、スクラップブックに残している〔図11〕。前述のとおり、「帝展」第8回展、第9回展は、中野和高が特選を重ねた年であるが、石川の入選も少なからず注目をあつめたということになるだろう。

以上のように、1929年の「青陽社」第2回展は、三氏の帰朝を記念とあるが、実際の帰朝は、石川が1927年1月、中野が1927年8月下旬であるので、二年近く間を置いて開催されたことになる。この「青陽社」第2回展開催までに、「帝展」では中野が特選、石川が入選を重ねた。さらに、前年の1928年の「東北産業博覧会」の公募展では、中野和高が審査員となって、「青陽社」の面々が出品した。すなわち、「青陽社」第2回展は、三氏の帰朝を記念したことに加えて、それまでの宮城県出身者による洋画の振興を背景に開催されたものと思われるのである。

3　大塚金吾

「青陽社」第1回展以降、大塚金吾は、河北新報社に勤めながら東京と仙台で作品の発表を続けていた。跡見学園女子大学図書館が所蔵する奥瀬英三（1891-1975）の資料のなかには大塚金吾（晩秋）からの葉書が7点含まれるが、そのうちの1924年の年賀状によれば、大塚は、「青陽社」第1回展と同年の1923年12月には仙台の本社に異動となり、「仙台市外桧木通早川邸内」に転居したようである。仙台へ異動した大塚は、西村氏によれば、1925年5月に澁谷栄太郎（1897-1988）が発起人となって宮城県図書館で開催した洋画展覧会に入選した[62]。

その後、奥瀬宛の1925年10月の葉書には、再び東京支局に異動となったことが報告されており、「東京府下大森木原山下馬込東」に住居を移した。1926年6月の葉書では、「仙台美術展」が盛会であったと報告しているが、この展覧会の詳細は不明である。この再上京にともない、大塚は、「光風会」第13回展（1926年）、「日本創作版画協会」第8回展（1928年）に入選しており、既に触れたとおり仙台の「東北産業博覧会」（1928年）の公募展にも入選した。また、この年10月に日本橋丸善で開催された馬込在住の画家からなる「馬込会」第1回展にも参加している[63]。この翌年には、同じく日本橋丸善で開催された「青陽社」第2回展（1929年）に参加し、《伊豆早春》〔図12〕を出品したものと思われるのである。

その後、大塚は、仙台で開催された河北新報社主催の公募展「東北美術展覧会（以下、東北美術展）」に深く関わった。「東北美術展」第1回展（1933年5月5日－14日）は、戦後も継続する「河北美術展」の第1回展にあたり、「東北美術協会」が主催した2度の展覧会（1930年5月、1931年11月）を前身として、宮城県商品陳列所で開催されたものである。顧問には、東北帝国大学で教鞭を執っていた木下杢太郎こと太田正雄（1885-1945）、児島喜久雄（1887-1950）、工芸指導所長の国井喜太郎（1883-1967）、宮城県知事の三辺長治（1886-1958）、平福百穂（1877-1933）、「東北産業博覧会」の審査員でもあった和田三造が名前を連ねた[64]。この第1回展では、洋画部門の審査員を、安井曾太郎（1888-1955）ともに中野和高が務め、大塚金吾、芦立文雄、菅野泉、菅野廉といった「青陽社」の面々が入選した。この翌年の第2回展（1934年5月5日－14日）には、石川誠、大塚金吾、芦立文雄、菅野泉らが入選しており、「東北美術展」に「青陽社」の人脈の一部が移行していることがわかる。第3回展以降はこの限りではないが、大塚金吾（晩秋）は、この第1回展から第5回展（1937年）まで入選を続けており、中野和高も第4回展まで審査員として参加を続けた。

大塚は引き続き東京においても積極的に作品を発表しており、「光風会」第18回展（1931年）、第19回展（1932年）、第20回展（1933年）、第22回展（1935年）に入選した。また、『資生堂ギャラリー七十五年史』によれば、「大塚金吾第三回洋画展覧会」（1934年5月18日－5月22日）、「大塚晩秋第四回洋画展覧会」（1936年7月13日－7月17日）、「大塚金吾第五回洋画展覧会」（1937年12月19日－12月24日）、「大塚金吾第六回洋画展覧会」（1939年9月1日－9月5日）、「大塚金吾第七回洋画展覧会」（1940年9月21日－9月24日）を資生堂で開催しており、第6回展の作品購入者にはアルスの北原鐵雄（1887-1957）の名前があるという[65]。『資生堂ギャラリー七十五年史』の編纂にあたっては、出品目録や芳名簿などが典拠とされたようだが、現所在は不明である。ただし、第3回展、第7回展の目録は東京文化財研究所が所蔵している。

このうち、第4回展については、『アトリエ』に「いづれの作品も甚だ感銘が薄い印象派の常識的な手法で、特に言ふべきことも無い有閑的なアマチュア画家」という手厳しい展評があるものの、会場写真や《外洋の朝》〔図13〕が誌上にとりあげられており[66]、『美之国』では「毎年東北美術展を開いて東北美術の啓蒙運動に奔走してゐる」と紹介されている[67]。

このように、大塚は東京と仙台の間をまさに奔走し、精力的に制作発表を続けたといえるが、1941年3月、河北新報の特派員として従軍した中国南部で戦死する。葬儀では、宮城県富谷出身の政治家であり早稲田大学で教鞭を執った内ヶ崎作三郎（1877-1947）が詩を送った。この年、戦時下にあって開催が見送られていた「東北美術展」が4年ぶりに再開し、第6回展には大塚金吾の遺作が展示された。『河北新報』には、黒いリボンを添えられた自画像などを並べた会場写真〔図14〕が掲載され、「東北美術展育ての親として献身的な努力をした人」[68]として、その功績が示され、審査員の安井曾太郎もまた、「広東の戦地で亡くなった大塚さんの遺作を数点並べたことは非常に美しく賑やかにしたと思ふ、以前の作より今度の方がとても美しい　大塚君はこの画展に大変お世話してくれたので亡くなられたことを今更ながら残念に思ふ」[69]として、大塚が「東北美術展」の中心人物であったことに言及している。

また、この二ヶ月後、資生堂では、中野和高、石川誠、資生堂の白川虔三（忍）が世話人となり、「大塚金吾遺作展」（1941年8月21日－25日）が開催された。これに先立つ8月4日には、大橋新一、白川忍、北原鐵雄が発起人となって追悼会を開催したという[70]。資生堂企業資料館にはこの遺作展の目録の複写があるが、その原本や芳名簿などは所在不明である。翌年、大日本海洋美術協会が発行した『海軍美術』には大塚の《広東風景》〔図15〕が掲載された[71]。

このように、大塚金吾は、河北新報社に勤務しながら、

東京では「光風会」や資生堂で作品を発表し、仙台では「東北美術展」の開催に尽力した人物であった。「東北美術展」には審査員の中野和高をはじめとする「青陽社」の人脈が当初は生きており、資生堂での「大塚金吾遺作展」の世話人に中野和高と石川誠が名を連ねたことは、「青陽社」のつながりが一過性のものではなかったことを示唆する。

4　石川誠

一方の石川誠は、「青陽社」第2回展に参加した後、1930年9月20日に再び渡仏した[72]。内海によれば、この二度目の渡仏は妻の美代子を同伴し、再び逓信省関係者の後援を受けたという[73]。渡仏前の作と思われる《晩秋の富士》(1930年)〔図16〕を大倉精神文化研究所が所蔵している。後景の富士と小川の鮮やかな青が目をひく作品である。

『日本美術年鑑』によれば、石川誠のパリ滞在中の留守宅は「府下大井町庚塚4923山口方」となっている[74]。「巴里憧憬と四つのサロン」によれば、石川は「サロン・ドートンヌ」第24回展(1931年11月1日－12月13日)に入選し、妻の美代子の装飾芸術も入選、翌年、第25回展(1932年11月1日－12月11日)には妻の美代子のみが入選した[75]。滞在先は、一度目の渡仏と変わらずソムラール通り(17, rue du Sommerard)である。

以下については、五十殿利治氏が既に指摘されたことの繰り返しになるが、石川夫妻は、当時パリに滞在した林芙美子(1903-1951)と交友があり、しばしば日記に登場する[76]。『滞欧記』(1937年)として公刊された1932年2月25日の日記には、石川夫妻とは日本に居た頃から面識があったとされており[77]、今川英子氏が編集して公刊された林芙美子の自筆日記帳には、2月25日、3月12日、24日、28日、4月7日に、石川が登場する[78]。

『滞欧記』5月4日の日記には、「夕方、H氏嬢と二人でI氏夫妻をさそつて石黒道場にゆく。牛原虚彦氏にあふ、よき人なり。」[79]とあり、このI氏夫妻はおそらく石川夫妻である。新宿歴史博物館所蔵の林芙美子旧蔵のアルバムに含まれる写真には、1932年5月4日の年記と「M.Ishikawa」のサインがあり、林芙美子、白井晟一(1905-1983)、石黒敬七らとともに、石川夫妻と思われる二人が写っている〔図17〕。後列の左端で石黒敬七に肩を組まれているのが石川誠、その手前が妻の美代子と思われる[80]。

『巴里週報』の復刻版は、この頃の第154号(1929年11月)から第244号(1932年5月)までが欠号しているため、一度目の渡仏ほど石川の交友関係を明らかにすることはできないが、第271号(1932年12月18日)には、「平山昌子嬢(画家)　石川誠氏夫妻　野口弥太郎氏夫妻　の諸氏は廿三日マルセーユ出帆の日本船伏見丸にて帰朝されることになつた」と報じられている。ただし、野口弥太郎夫妻は別便での帰朝となり、第279号(1933年2月12日)には宗教団体大本の西村光月より「石川夫妻、平山嬢、堀氏等頗る元気です」との通信が掲載されている。

帰朝後、石川は日比谷の美松百貨店で「石川誠氏滞欧作品展」(1933年7月1日－4日)を開催した[81]。『東京朝日新聞』(1933年7月4日)の展覧会評には「二回目の洋行を終えて二月に帰朝した氏の滞欧記録展」とあり、1933年2月には帰国したことがわかる。展覧会は、「パリ及び南欧各地を取扱つた風景画に、肖像画といつてもロカルな香の高い人物画三四点を加へ計七十点の賑やかな」ものであった。「中にはヴァーミリオン系の色彩が強烈に過ぎて画面に破綻を導いてゐるものも少なくない」という色彩の描写もある。

『アトリエ』には、「石井[ママ]誠氏帰朝 帰朝後渋谷区代官山同潤会住宅五の三二に居を移さる」と報じられており[82]、同年の「帝展」第14回展(1933年)には、《サント・ロッペ風景》〔図18〕が四度目の入選を果たした。本作では人物の様子が以前よりもはっきりと描き込まれており、渡仏前の平明な風景画から変化している。

内海によれば、1934年、石川夫妻は「世田谷区玉川奥澤町1-19」(現・世田谷区奥沢)にアトリエを構えており、同年3月に仙台で刺繍展を開催した際には「第二師団長御在任中の東久邇宮殿下の御台臨の光栄に浴し、御買上げを賜つた」という[83]。事実、1934年3月23日から5日間、石川夫妻は、仙台三越で「石川誠、同美代子滞欧作品展」を開催しており、『河北新報』にはその関連記事のほか、石川誠の《フランスの女》〔図19〕、《高台》〔図20〕が数日にわたって掲載された[84]。夫婦でそれぞれ30点ずつ、計60点を展示したといい、「石川君のことは今更記すまでもない、今回の渡欧は二回目で前回からみれば作風も大分変って来てゐてその後の精進の程も知られる」という、石川の作風の変遷を捉えた親しげな展覧会評は、同紙の記者であり、友人でもあった大塚金吾が関わっていた可能性も否定できない。妻の石川美代子については、「裂絵」による作品を手にした姿が掲載された。

この数ヶ月後、前章で触れたとおり、石川誠は「東北美術展」第2回展(1934年)に入選しており、資生堂では「石川誠個展」(1940年4月19日－21日)を開催している。既に言及したが、翌年には、中野和高とともに資生堂の「大塚金吾遺作展」(1941年)の世話人に名を連ねるものの、以降の消息は不明である。

以上のように、石川誠は、逓信省勤めの傍ら日本美術学校に修学、「青陽社」第1回展、第2回展に出品し、逓信省関係者の援助を受けて二度の渡仏を経験、帝展に入選を重ねた画家であったと要約することができる。1934年の仙台三越での展覧会開催、玉川奥澤でのアトリエの新築、そして資生堂での個展開催などは、その後の旺盛な活動を予感させるものであるが、1941年以降の消息は追えていない。

5　石川真琴

最後に、筆者が検討したいのは、第1章に戻って、大塚金吾とともに日比谷美術館の閉会式に参加した石川真琴のその後の経歴である。石川真琴は、「青陽社」第1回展以降、もっぱら鳥瞰図や教育関係の出版に携わったようであり、1924年には、関東大震災以前、以後の東京の鳥瞰図を描いた『東京大震火災絵巻 震災前の巻・震災後の巻』を有稲館から発行した。有稲館は、三重県の教育図書出版社である。同社を家業として東京支店に勤めた小川詮雄(1895-1944)は、上野山清貢と交友があった画家であった[85]。本稿までに調査は叶わなかったが、三重県立美術館は小川詮雄関連資料を一括受贈しており、1914年頃に制作された同人誌『flambeau』の赤(31号？)、青(27号)には石川真琴によると思われる執筆やカットがある。

また、石川真琴は『百科集録』(教潮社)の編集人となり、第3巻(1925年7月)から、住所が東大久保1番地ではなく、麹町区紀尾井町5番地となっている。正しくは6番地と思

われ、石川真琴は、後に同所の東京教材出版社の社長となった。

東京教材出版社の刊行物は1927年以降のもののみ残っているが、興味深いことに棟方志功（1903-1975）は、上京したての頃に石川真琴夫妻に面会し、東京教材出版社に図案工として1年半ほど勤めたと語っている。棟方の上京時期については諸説あるが、棟方志功の令孫である石井頼子氏によれば、1925年2月に棟方は石川真琴に会い、住み込みで勤め始め、1926年3月には東京教材出版社を辞めて松木満史（1906-1971）と同居し始めたという[86]。また、棟方は、石川真琴夫妻と、上野山清貢、早世した素木しづが、キリスト教信者同士の友人であったと石川真琴から聞いたと語っている[87]。

1930年代になると、石川真琴は「国防教育研究会」と称して、『防空読本』（1933年）、『非常日本国防図』（1934年）などを刊行しており、この間に東京教材出版社は「麹町区元園町1丁目29番地」に移転したものと思われる。1935年刊行の『国際経済大地図』（国立台湾歴史博物館所蔵）では、著作者が石川真琴、発行者が西田光敏となっているため、この頃には石川は同社の代表ではなくなったようで、最後に石川真琴の名が著作者として確認できる資料は、海軍省医務局推薦、大政翼賛会推薦と朱書きされた『応急手当法』（1942年）である。

以上のように、石川真琴は、白馬会溜池研究所に学び、上野山清貢と交友があった人物であり、「青陽社」第1回展を前に「大東京鳥瞰図」の作者として知られ、後に東京教材出版社の社長となった人物であると要約することができる。残念ながら、石川真琴についても、1942年以降の著作や活動を確認することはできていない。

まとめ

このように、本稿では、在京の宮城県出身画家の会とされる「青陽社」に焦点をあて、特に、大塚金吾（晩秋）、石川誠、そして、石川真琴を中心にその人脈を再考してきた。

まず、1923年に星製薬で開催された「青陽社」第1回展の出品者には、中野和高や石川誠のような駆け出しの画家や、在京の教師、漫画家、さらには大塚金吾のような新聞記者、後に東京教材出版社を起すことになる地図絵師の石川真琴などがおり、多彩な経歴をもつ人物が集まった。東京美術学校の卒業生が半数を占め、さらに「白馬会」や「光風会」、そして、その研究所や日比谷美術館に接した人物が確認される点は、第1回展時点の「青陽社」の人脈の性質を示唆する。つまり、東京美術学校や「白馬会」を軸とするアカデミズム、あるいは、本業をもつ若者たちのアマチュアリズムが交錯した、いわば未分化のコミュニティであったということであるが、一面的に結論することはできないため、引き続き検討する必要があるだろう。

この中にあって、中野和高、石川誠は、1929年に日本橋丸善で開催された「青陽社」第2回展までに、同時期に渡仏しており、それぞれ「帝展」で活躍していた。仙台で開催された「東北産業博覧会」（1928年）では中野和高が審査員となって公募展が開催されており、「青陽社」の面々が参加した。こうした宮城県出身者による洋画振興は、「青陽社」第2回展の背景として重要であると思われる。

1933年以降、仙台で開催された「東北美術展」では、河北新報社に勤務していた大塚金吾が中心となり、中野和高が審査員を務め、当初は「青陽社」の面々が入選していた。また、中野和高と石川誠が世話人となって資生堂で「大塚金吾遺作展」が開催されたことは、「青陽社」の人脈が、単発的な二度の展覧会に留まらず、その後の宮城県における洋画振興と地続きのものであったことを示唆しているといえるのではないか。

また、本稿では、帝展画家である石川誠、東京教材出版社の石川真琴という、これまで検討されてこなかった二人の人物の経歴を羅列的ではあるが検討した。上述してきた通り、この二人は、大塚金吾と交友があり、後藤新平の援助を受けた人物であった。さらに興味深いことに、仙台第一中学校同窓会発行の「会員名簿」（1932年）によれば、石川真琴の職業は「画家」、住所は「東京市淀橋区東大久保一（目下）在パリー」となっている。石川真琴が東大久保に住み続けたのか定かではないが、「（目下）在パリー」ということは、石川誠と同時期にパリに滞在していたことになる。これは、単なる偶然か、あるいは、同時代的に石川誠と混同されていたのだろうか。この二人の人物像を明確にすることは、大正期から昭和初期にかけての宮城県出身者による洋画振興のさらなる一面を明らかにすることにつながると思われるため、引き続き検討課題としたい。

付記　本稿は「筑波大学芸術学美術史学会令和2年度秋季研究発表会」日時：令和2年11月29日（日）での口頭発表「青陽社について　－石川誠、大塚金吾を中心に」をもとに加筆修正したものです。

本研究については、五十殿利治氏、西村勇晴氏、有川幾夫氏にご助言をいただきました。また、資料の閲覧及び掲載にあたっては、跡見学園女子大学図書館、磯谷商店、公益財団法人大倉精神文化研究所、資生堂アートハウス、新宿歴史博物館、東京文化財研究所、徳島県立近代美術館、三重県立美術館にご協力いただきました。御礼申し上げます。

註

引用は、旧漢字は新漢字にし、かなづかいは原典のままとした。

1　西村勇晴「1概説　仙台の近代絵画・彫刻 美術普及の流れ」、仙台市史編さん委員会編『仙台市史 特別編3 美術工芸』仙台市、1996年、306-366頁。

2　有川幾夫「7昭和の洋画家 戦前の具象絵画」仙台市史編さん委員会編『仙台市史 特別編3 美術工芸』仙台市、1996年、426-433頁。

3　資生堂企業文化部編『資生堂ギャラリー七十五年史：1919-1994』資生堂、1995年、222頁。

4　五十殿利治『非常時のモダニズム』東京大学出版会、2017年、197-201、478、481頁。

5　五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』スカイドア、1995年、83頁。

6　藤本一美「東京・江戸の鳥瞰図の世界－付録「大東京鳥瞰図」を中心に－」『地図情報』第121号、地図情報センター、2012年、20-21頁。
7　薬品の他にも「ホシクレオン」といった画材を販売していた。大塚浩一編『星の組織と其事業』清美堂、1923年、34頁。以下の資料の奥付には、立野繪州堂内青陽社との記載があるが、本稿で検討した「青陽社」との関係については不明である。矢崎好幸著『染色藝術クレオン染』青陽社、1925年。
8　『中央美術』第92号、中央美術学院、1923年、186頁。
9　『中央美術』第93号、中央美術学院、1923年、183頁。
10　東京美術学校の卒業生については、主に以下を参照。『東京美術学校卒業生名簿 大正15年』東京美術学校校友会、1928年。展覧会目録については、以下を参照し、注記または図版典拠に個別の資料名を示した。東京文化財研究所編『明治期美術展覧会出品目録』東京文化財研究所、1994年。東京文化財研究所編『大正期美術展覧会出品目録』東京文化財研究所、2002年。東京文化財研究所編『昭和期美術展覧会出品目録』東京文化財研究所、2006年。
11　東京文化財研究所編『近代日本 アート・カタログ・コレクション13-14 白馬会』全3巻、ゆまに書房、2001年。東京文化財研究所編『近代日本 アート・カタログ・コレクション 29-33 光風会』全5巻、ゆまに書房、2002年。
12　山梨絵美子「黒田清輝と国民美術協会」東京文化財研究所美術部編『大正期美術展覧会の研究』中央公論美術出版、2005年、375-391頁。
13　『近代日本 アート・カタログ・コレクション56国民美術協会』ゆまに書房、2003年。
14　小川隆章氏ウェブサイト http://seimeisi.web.fc2.com/sigesi/sigesi.html（2021年5月25日閲覧）。高島真『追跡「東京パック」』無明舎出版、2001年。
15　『日本美術年鑑（初年版）』朝日新聞社、1926年。
16　植野健造『日本近代洋画の成立 白馬会』、中央公論美術出版、2005年、32-33頁、269頁、272頁。
17　上田耕作「仙台画壇史（Ⅱ）」佐々木正芳編『凍土』第2号、1979年、頁数なし。西村、前掲書、325-326頁。
18　五十殿、前掲書、1995年、47-48頁、93頁。以下も参照。五十殿利治「投稿画と同人誌「銀皿」時代の東郷青児の登場」『観衆の成立 美術展・美術雑誌・美術史』東京大学出版会、2008年、159-172頁。
19　『美術新報』第11号、八木書店、1984年、229-230頁。
20　五十殿利治、菊屋吉生、滝沢恭司、長門佐季、水沢勉、野崎たみ子編『大正期新興美術資料集成』国書刊行会、2006年、403-405頁。
21　上田耕作「仙台画壇史（Ⅲ）」佐々木正芳編『凍土』第3号、1979年、頁数なし。
22　『菅野廉 卒寿記念画集』、1978年。玉田尊英『蔵王の画家 菅野廉』南北社、2014年。
23　以下にも言及がある。西村、前掲書、330-331頁、343頁。
24　『中野和高とその時代 パリが彼らの揺籃だった』宮城県美術館、愛媛県立美術館、1987年。
25　結城素明『芸文家墓所誌』学風書院、1953年、47頁。
26　大塚金吾「数万円を胴巻に納めて」、赤坂敬止『一力健治郎』私家版、1941年、149-152頁。
27　『海軍美術』大日本海洋美術美術協会、1942年、頁数なし。
28　『日本美術年鑑（昭和十七年版）』美術研究所、1943年、76頁。
29　『美術新報』第8巻、八木書店、1984年、337頁。鈴木美都田は葵橋洋画研究所の「油絵小品展覧会」にも参加、「円鳥会」第3回展（1924年）に出品がある。
30　岡常次『葵橋研究所展覧会記念 大正四年十一月』、葵橋洋画研究所、1916年。（東京文化財研究所所蔵）
31　五十殿、前掲書、1995年、83頁。
32　大塚金吾「実行主義者の濱田君」、濱田絹子編『八房の梅』私家版、1941年、177-178頁。
33　資生堂企業文化部編、前掲書、136頁。
34　『美術週報』第3巻、ゆまに書房、1998年、22頁。
35　1917年7月1日、8月2日の日記。『関根正二 遺稿・追憶』中央公論美術出版、1985年、52頁、70頁。
36　『美術週報』第5巻、ゆまに書房、1998年、110頁。
37　『みづゑ』第131号、春鳥社、1916年、34頁。
38　藤本、前掲書、20-21頁。
39　越澤明『後藤新平－大震災と帝都復興』筑摩書房、2011年。
40　西村、前掲書、339頁。
41　内海朝次郎「十二、扇風機代りに後藤逓相を団扇で扇いだ 石川誠画伯」『逓信畠の先輩巡礼』交通経済社出版部、1935年、149-162頁。
42　同前、150-151頁。
43　資生堂企業文化部編、前掲書、40頁。
44　『アトリエ』第6巻3号、アトリエ社、1929年、163頁。
45　『日本美術年鑑（第四年版）』朝日新聞社、1929年、67頁。
46　サロン・ドートンヌへの出品については、以下によった。金子百合子、大越久子、島村眞理、山本聡子編「巴里憧憬と四つのサロン」以下の付属 CD-ROM『巴里憧憬－エコール・ド・パリと日本の画家たち』美術館連絡協議会、2006年。
47　『巴里週報』については、以下の復刻版を参照した。石黒敬七、田中敦子、和田博文編、和田博文監修『ライブラリー・日本人のフランス体験 第1巻パリの日本語新聞－「巴里週報」Ⅰ』柏書房、2009年。
48　『仙台商工会議所主催東北産業博覧会誌』仙台商工会議所、1929年。
49　西村、前掲書、343頁。
50　「附表」『開校五十年記念 学習院史』学習院、1928年、51頁。

51　内海、前掲書、159-160頁。
52　『東京朝日新聞』朝日新聞社、1925年4月2日朝刊、5面。
53　「巴里憧憬と四つのサロン」（注46参照）によれば以下の通り。「Salon d'Automne 18e ／ ISHIKAWA（Makoto）— 17, rue du Sommerard. ／ 655. — Après la pluie, p. 」
54　Jules de Saint-Hilaire, "Exposition du Cercle Japonais, Les œuvres de Makoto Ishikawa" *Revue du vrai et du beau : lettres et arts,* no. 71, C. Balleroy, [Paris] , 10 Nov., 1925, p. 14.
55　柳沢秀行「1920年代 パリの日本人画家」『1920年代 パリの日本人画家』1994年、岡山県立美術館、7頁。
56　江川佳秀編「年譜－両大戦間のパリにおける日本人美術家の動向」『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』展図録、共同通信社、1998年、210-226頁。
57　『旅へのあこがれ－画家たちのグランド・ツアー』展図録、目黒区美術館、1997年、19頁。
58　江川、前掲書、210-226頁。
59　『巴里週報』第17号（2）、1925年12月5日。
60　『巴里週報』第63号、1926年11月15日。
61　吉村芳松「石川誠滞欧洋画展」『美術新論』第2巻第8号、美術新論社、1927年、104-105頁。松本弘二「石川誠滞欧作品展」『アトリエ』第4巻第7号、アトリエ社、1927年、9頁、142-143頁。以下も参照。『日本美術年鑑（第二年版）』朝日新聞社、1927年、111頁。『みづゑ』第269号、春鳥会、1927年、811頁。
62　西村、前掲書、340頁。
63　『美之国』第4巻11号、行楽社、1928年、122頁。
64　西村、前掲書、347-349頁。以下も参照。『河北美術展 半世紀の歩み』展図録、宮城県美術館、河北新報社、1986年。
65　資生堂企業文化部編、前掲書、136頁、160頁、174頁、192頁、209頁。
66　尾形多計「展覧会月評」『アトリエ』第13巻第9号、アトリエ社、1936年、69-70頁。
67　『美之国』美之国社、第12巻8号、1936年、123頁。
68　『河北新報』河北新報社、1941年6月6日、3面。
69　安井曾太郎「東北美術展評③」『河北新報』河北新報社、1941年6月10日、3面。
70　資生堂企業文化部編、前掲書、222頁。
71　『海軍美術』前掲書、89頁。
72　『美術新論』第5巻10号、美術新論社、1930年、192頁。
73　内海、前掲書、160頁。
74　『日本美術年鑑（第五年版）』朝日新聞社、1930年。第六年版（1932年）、第七年版（1933年）も同所。
75　「巴里憧憬と四つのサロン」（注46参照）によれば以下の通り。「Salon d'Automne 24e ／ ISHIKAWA（MSKOTO）／ 1033. — Le village, p. ／ ISHIKAWA（Mme Miyoko）／ 1034.　— Côte de la mer, a.d., 1035.　— Restaurant, a.d.」「Salon d'Automne 25e ／ ISHIKAWA（Mme MIYOKO）, née à Tokio. Japonaise. — 17, rue du Sommerard. ／ 776. — Les pêcheurs, a.d. 777. — Café, a.d」
76　五十殿、前掲書、2017年、197-201、478-481頁。
77　林芙美子『滞欧記』改造社、1937年、47頁。
78　今川英子編『林芙美子 巴里の恋』中央公論新社、2004年。
79　林、前掲書、78頁。
80　以下には2枚の写真が掲載されている。『林芙美子の芸術』日本大学芸術学部図書館、2011年、66頁。
81　『アトリエ』第10巻8号、アトリエ社、1933年、70頁。
82　『アトリエ』第10巻4号、アトリエ社、1933年、71頁。
83　内海、前掲書、149頁、162頁。
84　『河北新報』河北新報社、1934年3月22日朝刊、4面。3月25日朝刊、3面。3月27日朝刊、5面。
85　『日本近代絵画の青春－大正の絵画－』展図録、星野画廊、1991年、7頁。
86　石井頼子編「棟方志功 略年譜」『棟方志功 萬鉄五郎に首ったけ』図録、萬鉄五郎記念館、2015年、185頁。
87　棟方志功『板極道』中央公論社、1964年、151-152頁。

図版一覧

〔図1〕日比谷美術館閉会式 写真
1915年12月11日
佐藤久二親族所蔵 協力：磯谷商店
左から大塚金吾、佐藤久二、石川真琴

〔図2〕石川真琴 写真1921年

〔図3〕石川誠《冬の郊外》1922年
「平和記念東京博覧会」入選 現所在不明

〔図4〕石川誠《晩秋の小道》1922年
カンヴァス・油彩 38.0 × 45.5cm
宮城県美術館蔵

〔図5〕石川誠《漁村》1924年
「帝展」第5回展 入選 現所在不明

〔図6〕石川誠《雨後》1925年
「サロン・ドートンヌ」第18回展 現所在不明

〔図7〕石川誠《春の地中海》1927年頃
石川誠氏滞欧洋画展 現所在不明

〔図8〕石川誠 写真 1927年

〔図9〕石川誠《カンヌ風景》1927年
「帝展」第8回展 入選 現所在不明

〔図10〕石川誠《代官山風景》1928年
「帝展」第9回展 入選 現所在不明

〔図11〕石川誠 写真 1928年

〔図12〕大塚金吾《伊豆早春》1929年
「青陽社」第2回展 現所在不明

〔図13〕大塚金吾《外洋の朝》1936年
現所在不明

〔図14〕「東北美術展」第6回展 1941年
大塚金吾遺作特別展示 会場写真

〔図15〕大塚金吾《広東風景》1940年
現所在不明

〔図16〕石川誠《晩秋の富士》1930年
カンヴァス・油彩 72.5×91cm
大倉精神文化研究所蔵

〔図17〕林芙美子 帰国送別会 写真
1932年5月4日 新宿歴史博物館所蔵
後列左端が石川誠、その手前が美代子か。
なお、後列右から牛原虚彦、石黒敬七、
前列右から白井晟一、林芙美子、左端は平山昌子（？）

〔図18〕石川誠《サント・ロッペ風景》
1933年「帝展」第14回展入選 現所在不明

〔図19〕石川誠《フランスの女》1934年頃
「石川誠、同美代子滞欧作品展」現所在不明

〔図20〕石川誠《高台》1934年頃
「石川誠、同美代子滞欧作品展」現所在不明

図版典拠

〔図2〕石川真琴 写真：『東京朝日新聞』1921年11月3日5面。
〔図3〕石川誠《冬の郊外》1922年：『平和祈念東京博覧会 美術館出品図録』美術工芸社、1922年、頁数なし。
〔図5〕石川誠《漁村》1924年：文部省編『帝国美術院 第五回 美術展覧会図録 西洋画之部』審美書院、1924年、15頁。
〔図6〕石川誠《雨後（Après la pluie）》1925年：Jules de Saint-Hilaire, "Exposition du Cercle Japonais, Les œuvres de Makoto Ishikawa" *Revue du vrai et du beau : lettres et arts,* no. 71, C. Balleroy,［Paris］, 10 Nov., 1925, p. 14.
〔図7〕石川誠《春の地中海》1927年：『日本美術年鑑（第二年版）』朝日新聞社、1927年、111頁。
〔図8〕石川誠 写真 1927年：『アトリエ』第4巻第7号、アトリエ社、1927年、9頁。
〔図9〕石川誠《カンヌ風景》1927年：文部省編『帝国美術院 第八回 美術展覧会図録 第二部絵画西洋画之部』1927年、23頁。
〔図10〕石川誠《代官山風景》1928年：文部省編『帝国美術院 第九回 美術展覧会図録 第二部絵画西洋画之部』1928年、15頁。
〔図11〕石川誠 写真 1928年：「洋画界の一異彩 石川誠氏喜び」1928年10月掲載紙不明記事［菅井庄五郎スクラップブック］
〔図12〕大塚金吾《伊豆早春》1929年：『日本美術年鑑（第四年版）』朝日新聞社、1929年、67頁。
〔図13〕大塚金吾《外洋の朝》1936年：『アトリエ』第13巻第9号、アトリエ社、1936年、頁数なし。
〔図14〕「東北美術展」第6回展 大塚金吾遺作特別展示 会場写真：『河北新報』河北新報社、1941年6月6日、3面。
〔図15〕大塚金吾《広東風景》1940年：『海軍美術』大日本海洋美術協会、1942年、89頁。
〔図18〕石川誠《サント・ロッペ風景》1933年：文部省編『帝国美術院 第十四回 美術展覧会図録 第二部絵画（西洋画）』画報社、1933年、9頁。
〔図19〕石川誠《フランスの女》1934年頃：『河北新報』河北新報社、1934年3月27日朝刊、5面。
〔図20〕石川誠《高台》1934年頃：『河北新報』河北新報社、1934年3月25日朝刊、3面。

典拠のないものは所蔵者より図版の提供を受けたものです。
なお、石川誠、石川真琴の肖像写真および作品は、著作権者の情報を得られぬままの掲載となりました。お詫び申し上げますとともに、ご存じの方がいらっしゃいましたら、ご一報いただければ幸いです。

宮城県美術館

令和2年度 年報
令和3年度 研究報告

発　行　日　令和3年9月30日

編集・発行　宮城県美術館
980-0861 仙台市青葉区川内元支倉34-1
TEL 022-221-2111
FAX 022-221-2115

印　　刷　今野印刷株式会社
984-0011 仙台市若林区六丁の目西町2-10

©宮城県美術館　2021　　printed in japan

この年報は350部作成し，1部あたりの印刷単価は1,892円となっています。